

# 今を生きる

Take the bitter with the sweet.

苦いものは甘いものと一緒に受け取れ

20年の節目に、西武台を巣立った方々の「今」を探りました。

「今」の選手に、「今」活躍しているOB・OGの姿を見てほしかったのです。

現実はその簡単ではありませんでした。

当然ですが、人生には楽しい一面も、苦しい一面もあります。

だとすると、人はその一面だけでなく、両面をありのままに受け入れなければなりません。

どなたでもそうでしょうが、暮らしていく、生きていくのも楽じゃない、

そんなことがありますよね。

まだまだ若い彼らの、小さな荒波を越えながら生きていく、

たくましい姿をうかがい知る機会になりました。

自分の人生の中でかみ砕き、それをエネルギーにしている皆さん、

200人近くになる西武台バドミントン部を巣立った皆さんの、

ほんの一部だけの紹介ですが、どうぞ目と心を傾けてください。

苦難を超えた本当の楽観が顔をのぞかせます。

What will be, will be.

なるようになる「ケセラセラ」

❖荒井 康弘さん

川間中一 3 期生主将一東京経済大学卒  
日本興亜損害保険株式会社  
札幌支店営業第三課課長補佐



第3期生で優等生、キャプテン、二枚目……。いい条件が備わっていますが、入学当時は、二軍、三軍、コートに入れない彼でした。しかし、持ち前の頭脳と、何と言っても親譲りの大きなハートで、気づいたら部内でトップ、県大会でも大活躍し、西武台初関東出場のエースになっていました。大学に入ると、すぐに彼女（今の奥様）を見つけ、2人仲良く合宿などに差し入れ方々来てくれました。就職は現在の日本興亜損害保険株式会社にすんなり入りましたが、この御時世、吸収、合併、リストラ、転勤の網をくぐり抜け、現在は若くして多くの部下を従えた身です。学生時代に「日本全国どこでもいいから、仕事したいですね。それもバリバリ」と言っていた事を思い出します。彼のエネルギッシュな生き方は、まるでドラマや、映画の主人公並です。人生で大切な事は、バイタリティーだと深く確信しました。第35回全国高等学校選抜大会は、今月25日より札幌で行われます。彼の生き方に恥じない、元気なプレーをお届けします。

❖岡安 満さん

川間中一 5 期生一東洋大学卒

❖田中 奈緒さん

大津が丘中一 9 期生  
(株)キャビン柏店



「いつもお世話になってます！キャビンです」  
明るい電話の声は田中さん、そしてニコニコ顔で商品をお届けしてくれるのが岡安君。西武台はキャビンに支えられてきたと言っても過言ではありません。私が始める頃、いろいろ面倒をみてくれた鈴木社長さん。「先生、僕等も背中に YONEX って入った T シャツが着たいんですが……」と二期生に言われ、鈴木さんは YONEX に交渉。「これは関東とかインハイに出ないと買えない」との答えに、鈴木さん「じゃ、胸にプリントしましょうよ！」と真っ白な T シャツの前に YONEX のロゴを入れてくれました。子供達が、嬉しそうに着たのを見て、「いつかは色つきの YONEX シャツを着れるようにな！」と言いました。みなさんは、何も感じずにその色とりどりの YONEX シャツを着ていると思いますが、昔は、そんな事があったのです。その社長さんがある日、柏に店を出すにあたって、西武台から誰か……という話を、大学生の岡安君に。そして数年後、本当は鴨川シーワールドで、イルカの調教をやりたいと本気(?)で言っていた田中さんが入りました。

2人とも、人に言えぬ苦労を重ねました。しかし、末松店長さんや周囲の方々にも育まれ、決してお客さんへの笑顔を決やさない強い心、そして思いやりを持って立派な「商人（あきんど）」になりました。そして今、私たちはキャビンに、この2人の OB、OG に支えられているのです。毎度ありがとうございます。

❖小池 温子さん

越谷栄進中一 15 期生

広島ガス株式会社バドミントン部



左小池さん 2006年日本リーグ船橋大会

「泣き虫温子」でした。それが、インハイで、国体で活躍して広島へ。「卒業したら実業団に入りたいんです」と、入学直後から言っていたとおり彼女は今、活躍しています。ちょうど、これを書いている日（1月29日）の中国新聞に、大会に出場する彼女の記事がありました。

紹介します。

## 広ガス2選手がオールスター戦へ

【写真説明】「ファンを楽しませる試合をしたい」と初の球宴を前に練習する小池(左)、日野



バドミントン日本リーグ女子1部・広島ガスの日野由希江、小池温子が、リーグの東西対抗オールスター戦(2月3日、札幌市)に出場する。広島ガスの選手が出場するのは3回目。強豪選手と肩を並べ、初の夢舞台に挑む。

オールスター戦は1部の男女計16チームを東西に分け、男女各10人が出場。男女のシングルス、ダブルス各3組、混合ダブルス1組で争う。ともに4年目の2人は、ファン投票を基に西軍女子の10人の中に選ばれた。

現在、ダブルス日本ランク18位。タッチの速さなどが持ち味で、昨季の日本リーグは全7試合に第1ダブルスで出場。3勝4敗と負け越したが、同ランク3位の赤尾亜希・松田友美組(ヨネックス)を倒している。

西軍には、ドーハ・アジア大会女子ダブルス銀メダルの小椋久美子・潮田玲子組(三洋電機)ら日本代表選手がそろう。「とにかく楽しんできたい」と日野。小池も「ファンに楽しんでもらえるような試合をしたい」と意気込んでいる。宮崎克巳監督は「意識を高く持って臨んでもらいたい」と期待する。(2007/1/29 中国新聞)

「願い続ければ叶う。」そして、また夢ができふくらみます。辛かったら、いつ帰ってきてほしいと思います。また再び翔くにちがいありませんから。

## ❖小林 勝行さん

川間中一4期生一大学一土木系専門学校  
(有)小林設備

高校時代は「トン平ちゃん」や「ベニー」があだ名の彼も、今では、野田市や全国でも押しも押されぬ名コーチになりました。

岩名ジュニアのコーチの前は西武台のコーチをやっていました。7期から9期くらいまではお世話になった選手も多かったと思います。現在は、岩名ジュニアのコーチをしながら、もうひとつ上



のアルファ野田ジュニアのヘッドコーチとして、仕事の合間を見てボランティアで子供たちの指導に情熱を燃やしています。

2006年夏、男子野田ジュニアチームが念願の若葉カップ初優勝を成し遂げ、指導力を身につけ、着実な成長をしています。そんな彼にもわかってきた事があると思います。それは子供を育てるということはひとりではできない、ということ。多くの人々の力を結集して、囲み、はぐくむことが大切なのです。幸い、田口総監督(第16期保護者会長)はじめ、町の多くの方々にコーチや世話役をやっていただいて、ここにいる事に彼は実感として学んだに違いありません。

ひとりでは生きていけない。だから、花嫁募集中です。

## ❖小野塚 賢治さん

新松戸北中一12期生主将一獨協大学  
西武百貨店[ロフト]大阪店



小野塚さん 携帯で撮りました

2006年夏のインターハイは奈良で行われました。奈良から大阪へは近鉄線でわずかな距離です。3日目の夜、大阪の彼に電話をかけました。そして翌晩わざわざ奈良のホテルまで駆けつけてくれました。

新松戸北中出身で、県大会こそ出場していませんでしたが、運動能力が高く、なにより人柄がいい彼は高校時代第12代キャプテンをつとめました。インターハイには出られませんでした。中学時代のトップ選手に勝つ成長ぶりを見せ、卒業後は、私の母校である大学に、バドミントン部から初めて進学しました。

しかし、その後実家の倒産や、母親の病気などが重なり、自暴自棄の日々が続きました。様々なアルバイトをし、大学をようやく卒業する頃、私は、彼からの長い筆文字の手紙を受け取りました。そこには切々と彼のそのころの苦悩や挫折がつけられ、そしてそれらに立ち向かい、克服した喜び

がこちらに伝わってきたのです。私は涙を流しながら読んだ記憶があります。

関西方面に行く時は、電話をしたり手紙を書いたりしています。かれは西武デパート（ロフト）に勤め、大事に大事に仕事をしています。年に一度、これはと思うお酒を送ってくれる彼は、働きながら、キックボクシングも始めたそうです。人生には自分ではどうしようもない苦勞がありますが、最も大切な、自分の道を切り拓き前に進む彼に乾杯！

#### ❖星野 貴子さん

松伏中一第9期主将一大東文化大学  
FAUCHON 高島屋柏店（製パン業）



調理場で 左星野さん

大学は、文学部の英米文学を学び、バドミントンも、その大学を5部から2部に昇格させたほど熱心にやっていたが、高3頃からそれとなく言っていた、農業、食品などの「ものづくり」への夢がますます大きくなり、大学卒業後、カナダの農場へ留学、帰国後はパン職人になるべく、修行中の身です。柏の高島屋にあるこの店は、ちょっと高級パン屋さんで、きれいな店内ですが、彼女がいる厨房は闘いのごとく忙しい職場です。今の店に来て3年、実はこの写真の直後に店を辞め、3度目の修行の場に変わることになっています。パン職人の検定試験は受験までに5年の実務経験が必要になります。5年間勤めるのはさほど難しいことではないですが、そこでの「技術の習得」には骨が折れると思います。何しろ「学校」ではないので、仕事をしながら、つまりプロとしてミスが許されない状況で学ばなければならないのです。ある時は全く調理とは関係のないこともしますし、他の職人さんとの人間関係に押しつぶされそうになりながらも、その職場で生きていかねばなりません。「いつの日か自分の店を持ちたい」それは誰しもが考え、願うことですが、彼女もその思いをもつひとりです。

そんな彼女の腕のあちこちにヤケドの跡が、仕

事のつらさを物語り、逆に、職人人生の勲章にもなっているのだらうと思っています。

願い続ければ叶います。

#### ❖秋山 裕樹さん

武里中一13期生一千葉商大〔中退〕  
(有)春日部ゴム



工場で 2006年暮れのある日

春日部市の中心より少し西に離れた、旧街道沿いの両側に、まるで映画のセットのような工場に、年末の忙しい時期ではありましたが、お邪魔しました。「春日部ゴム」というその会社は、ゴム製品全般を扱い、特に三輪車のタイヤなど黒いゴム製品を作り出しています。初代社長の〇〇さんは、昔、職業軍人だったという戦前世代で、高齢ですが、しっかりした説明で私を会社の中に案内してくれました。

ゴムは原料をこね、成分調節をし、板状に伸ばし、裁断し、形成し、ひとつひとつ製品にしていきます。それぞれの部署には、それぞれの職人がいて、パートの女性たちとそれはもう家族的であり、昭和感覚の職場を作っています。ゴムを形成する過程で、石灰を使いますので、床や工場全体が白く粉々して、そしてゴム特有の臭いと、夏なら40度以上になるというムーとした感じが印象的でした。

秋山君は、13期生でご存じ秋山和夫先生（松伏中一武里中）のご長男です。中学の途中でバドミントンをお父様より直接指導され、本校に入学してきました。当時は経験も浅く、最下位の選手でしたが、高3のインターハイ（岐阜県各務原市）では、パートナーの石井選手の熱中症というアクシデントの中、堂々ベスト16に入りました。卒業後、大学に進学しましたが、人生という大きなキャンパスにはバドミントンだけでは描ききれない夢があり中退、親類の経営するこの工場に就職しました。自分の考えでその職を選びましたが、とても今の若者向きとは言えないその工場に、彼はひたむきに働き続けました。